

「……希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」(ローマ5・1-2、5)。この「希望はまさしく愛から生まれ、十字架上で刺し貫かれたイエスのみ心からわき出る愛がその根本」(大勅書3)です。このイエスの愛に基づき希望は欺くことはありません。そしてこの希望は、「洗礼とともに始まるわたしたちの信仰生活の中で……聖霊の働きによって、たえず新たにされ、揺るがないものとされる」と教皇フランシスコは強調しています。さらに、聖アウグスティヌスの言葉を引用しながら、「どのような生活のしかたであれ、信じ、希望し、愛するという、魂の三つの性向なしに、人は生きることができません」と教えています。

わたしたちキリスト者は、洗礼のときに与えられた聖霊の恵みによって、信仰と希望と愛という三つの対神徳(神へと向かわせる聖霊の力)が各自の心に注がれて、この地上における人生の旅路が支えられている恵みを、神様に感謝したいと思います。また教皇フランシスコは、「希望と密接に結びついた徳」として、「忍耐」の徳を思い起させ、「希望を支えてくれる忍耐の恵みを、しばしば願うこと」(大勅書4)を勧めています。

希望の道

主キリストとの出会いを目的とするキリスト者は、信仰、希望、愛、そして忍耐の徳によって歩み続ける旅路の途上にあつて、「希望を養い強める絶好の機会を必要」(大勅書5)としていると、教皇フランシスコは教えています。そのために教皇は、教会の歴史の中で、1300年に最初に聖年が祝われたときから、それぞれの特徴をもつて祝われてきた過去の聖年の体験を全体的に振り返っています。そして「どの過程にあつても、熱い信仰をもつて歩み、愛のわざに励み、辛抱強く希望し続ける」(1テサロニケ1・3)民に対して、神の恵みが先行し、かつ伴っている「ことを思い起こさせています。そして、聖年が「希望を養い強める絶好の機会」であり、「全教会にとつて恵みと希望の濃い体験となる」(大勅書6)ようにと願っています。

希望のしるし

また、教皇フランシスコは、「希望を神の恵みからくみ取ることに加え、主がわたしたちに差し出す、時のしるしの中にも希望を再発見するよう」促しています。聖年を機会にわたしたちは、今日の「時のしるし」の中に希望を見だし、「希望をもつて将来をみる」(大勅書9)、心構えを持つことを大切にしたいと思えます。そして、このような心構えをもつて生きることに、「聖年の間にわたしたちは、苦しい境遇のもと

で生きる大勢の兄弟姉妹にとつての、確かな希望のしるしとなるよう求められます」(大勅書10)と、教皇フランシスコは、キリスト者の使命を語っています。こうして、数多くある具体的な事例の一つとして、「受刑者の人権を尊重した尊厳ある待遇、そして何よるも死刑の廃止を、声を一

つにし、勇気をもって訴える」(同)ように呼び掛けています。

さらに、教皇フランシスコは、教会共同体としても旅をしているわたしたちが、現代社会の中で困難に直面し、苦しんでいるいろいろな立場の人々(病者、障害者、若者、移住者、難民、高齢者、貧しい

はじめまして、ルーチェです!

2025 聖年のテーマ「希望の巡礼者」を表す「ルーチェ」はバチカン公式マスコットキャラクターイタリア語で「光」を意味する言葉

黄色のレインコート
バチカンの国旗をイメージし「人生の嵐を乗り越える旅」の象徴

輝く目「心の希望の象徴」
目の中のホタテ貝
巡礼の伝統的なシンボル

杖
「絶えない巡礼」を表す

汚れたブーツ
「長く困難な旅」を表す

教区巡礼指定教会では様々なルーチェがみなさんを待っています。ぜひ会いにお出かけください!

人々など)のために、どのような希望のしるしとなり、またどのような叫び(訴え)の代弁者となることができるのかについて、具体的な事例を列挙しています(大勅書11~15)。

希望を求める訴え

「聖年は、地上の財は限られた特権的な人たちのためではなく、すべての人のためにある」ことを思い起させ、「自分の兄弟である困窮者たちの顔に目を向けなければなりません」と教皇フランシスコは、呼びかけています。また、「武器やその他軍事費に使われているお金で国際基金を設立し、……飢餓撲滅、そして最貧国の発展のために」助け合うよう訴えています(大勅書16)。同じく、富裕国に対して「返済が不可能な国の債務を免除する」ように求めています。

さらに、教皇フランシスコは、キリスト者に対して、2025年の聖年が、ニケア公会議から一七〇〇年となる重要な記念すべき年であることを注目させています。こうして、「使徒時代以来、司教たちは教義と規律に関する諸問題を取り扱うため、さまざまな機会に集いを持っていたことを」(大勅書17)思い起こさせ、このような「……教会会議(シノドス)が繰り返され、神の民の一致と福音の忠実な告知とを守り抜くことがいかに重要であるか」を示してきましたことに注目を向けさせています。その上で「今日のキリスト教共同体が、福音化の急務によりふさわしく対応」し、「シノダリティ(ともに歩むこと)の姿を具体化するため、聖年が大事な機会となる」(同)ように願っています。ニケア公会議は、信条をまとめて「すべてのキリスト信者が同じ一つの信仰を告白する」ことができるようにしました。また、ニケア公会議は、今日、ローマ・カトリック教会が祝っている復活祭の日付のあり方を決定しました。ニケア公会議の一七〇〇周年を祝う諸教会と全教会共同体に対して、さらに「目に見える一致へ

向かって歩み続け」(同)るように促しています。

希望に「錨」を下して

教皇フランシスコは、再度、希望が、信仰と愛とともに、キリスト者の生き方の本質を表す三つの対神徳であることに言及し、「不可分なそれらのダイナムズムの中にあつて、希望は、信仰者の生き方の方向と目的を示す、いわば指南役」(大勅書18)であると教えています。そして、「わたしたちの希望の基になるものは何でしょうか」(同)と問いかけて、その希望の基となる事柄(1ペトロ3・15)についての説明をしています。

「永遠のいのち」

「この希望の徳によって、わたしたちは……幸せをもたらしてくれる……永遠のいのちを待ち望みます」(大勅書19)。第二バチカン公会議も、「神という基礎と永遠のいのちに対する希望が欠けると、今日しばしばみられるように、人間の尊厳はひどく傷

つけられ、生と死、罪と苦しみの謎は解けないままであり、その結果、絶望に陥る人も少なくない」(『現代世界憲章』21)と教えています。

「死んで復活したイエス」

教皇フランシスコは、聖パウロが「キリストは、死んで、墓に葬られ、復活し、出現した」という、わずかに四つの動詞によって、わたしたちの希望の核心を伝えていることを思い起こさせています。また、御父の愛が聖霊の力によつて、人となられた御子キリストを復活させてくださったことに、

「キリスト者の希望がある」(大勅書20)と述べています。そして、「まさしく洗礼においてキリ

ストとともに葬られたわたしたちは、復活したキリストのうちに、新しいいのちのたまものを授かり……、そのいのちは、死の壁を破り、永遠のいのちへと向かう」(同)道となると強調しています。そのために教皇フランシスコは、聖年が「洗礼で授かった新たないのちのたまものを、深い感謝の心をもって再発見する機会を与えてくれる」(同)と、述べています。



2024年12月29日(日)に行われた通常聖年開幕ミサの様子
世界平和記念聖堂(幟町教会)

〔神の審判〕

教皇フランシスコは、「永遠のいのちと結びついたもう一つの現実」に目を向けさせます。それは「わたしたちの生の終わりと、世の終わりにある神の審判です」(大勅書22)。この「人生を総括するとき備え、十分な自覚をもって真剣に準備する」ために、「つねに対神徳である希望の次元で備えるべき」であると、教皇フランシスコは教えています。希望は、愛である神への信頼を強めて、「活力を与え、不安に負けないように」(同)するからです。「愛である神の審判は、愛に基づくもので、とくに、もっとも貧しい人に対してどれだけの愛を実践したか、しななかったかのみに基づいて下されるもの」(同)だからです。しかも、「審判のとき、わたしたちは、世とわたしたちの中にあるすべての悪に打ち勝つキリストの愛の力を体験し、受け入れる」(同)のです。しかし、キリストの愛をふさわしく受け入れるためには、「イエ

スがその死と復活によってわたしたちのために獲得してくださった救い」(同)の恵みによって、「神の愛へと決定的に過ぎ越せるよう」(同)わたしたちが清められる必要があります。

〔免償〕

わたしたちの犯す罪は、心から痛悔してゆるしの秘跡を受けることにより、キリストの救い(贖い)の恵みによって、ゆるされます。しかし『カトリック教会のカテキズム』が教えているように、「小罪を含めたすべての罪は被造物へのよこしまな愛着を起かさせます。人はこの愛着から、この世であるいは死後、清められなければなりません。死後の清めの状態は煉獄と呼ばれます」(1472)。聖年の免償の恵みは、罪をゆるすことではなく、罪の残滓(ざんし)として残る被造物へのよこしまな愛着からの清めです。この免償の恵みをいただく方法については、前回の教区報の記事、またこの度、配布されたリーフ

レット「2025聖年」を参照していただければ幸いです。

「錨のイメージで表される希望」

聖書は「わたしたちがもっているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなもの」(ヘブライ6・18)であると教えています。「これは、わたしたちに与えられた希望を決して失うことのないよう、神のもとに避難所を見いだすことによつてその希望にしがみつこうようにとの、力強い招きです」(大勅書25)。「錨のイメージが雄弁に示唆するのは、人生の荒波にあつても、主イ

エスに身をゆだねれば手にできる、安定と安全です。嵐に飲まれることはありません」と、教皇フランシスコは励ましています。この聖書のことばを基に、「希望の巡礼者」というテーマのロゴマークが作成されています。

「海の星であるマリア」

民間信心の中で、マリアは「海の星」(ステラ・マリス)と呼ばれています。「この称号は、人生の荒波の中にあるわたしたちを、神の母は助けに来てくださり、支えてくださり、信頼をもつて希望し続けるよう招いてくださるといふ、確かな希望を表してい

ます」(大勅書24)。
.....
終わりに

以上、教皇フランシスコの大勅書に示されている教えを概説しました。希望のもっとも「偉大なあかし人」である神の母聖マリアの取り次ぎを願いながら、わたしたちは現代の種々の荒波の中でも「希望の巡礼者」となっていく恵みを、この聖年の間に祈り求めて行きたいと思ひます。



「希望は欺かない」
2025年の通常聖年公布の大勅書 全文のQRコード

2025 聖年



ロゴマーク

- § 四人の人物：地球の四方から集まってきた全人類を示す。
(抱き合っている姿は、連帯と友愛の意味)
- § 人物の下の波：人生の旅がいつも穏やかな歩みではないことを示す。
- § 下部が錨の形の十字架：錨は希望の比喩であり、十字架は「わたしたちの希望」(1テモテ1・1)であるキリストを示す。

カトリック広島司教区
《お問い合わせ》
平和の使徒推進本部
pcaph@hiroshima.catholic.jp

教 区 の 動 き

2024年度(第二回)
広島司教区宣教司牧評議会
開催

開催

去る12月14日(土)、2024年度第二回広島司教区宣教司牧評議会(以下、教区宣司評)がリモート会議形式と併用で開催された。白浜司教、司祭、修道者、信徒の26人が出席した。会場の広島カトリック会館多目的ホールには出席評議員の過半数の19人が集い、その他7人はリモート接続して予定通り会議を開始した。

教区宣司評は、白浜司教の挨拶と「聖年のための祈り」に続いて次の報告事項から始まった。前半の報告は今回の宣司評から、教区内の各委員会・組織に任意で報告して頂く時間とした。今回は「カリタス広島」「青年活動企画室」「百年史編纂委員会」から報告があった。

カリタス広島は、現在、パンフレットを準備中、

災害時のパイロット教会を各地区に整備中とのこと。青年活動企画室は、昨秋、山口教会で開催した「サビエル・フェスタ・2024」の報告。百年史編纂委員会は、今夏までには完成・発行を目指しているとのこと。

続いて各地区・修道女連盟から報告があった。修道女連盟からは、昨秋、聖パウロ女子修道会広島修道院が閉鎖(10ページ参照)、今年度末に師イエズス修道女会広島修道院が閉鎖になる予定、今春、三地区の修道女連盟がひとつになる準備を進めているとの報告があった。

報告事項に続いて評議事項では、次の各評議内容の説明と評議員による意見交換が行われた。まず平和の使徒推進本部の傘下に組織されるシノドス対応調整チームから、2月24日(月・祝)に開催予定の「第二回宣教ひろば」

の開催内容と要望事項について説明があり、評議員からの質疑応答があった。今回の「宣教ひろば」は各協働体レベルで開催されるが、毎年2月の開催を計画しており、次回は各地区レベル、次々回は教区レベル

平和の使徒となろう



平和の使徒推進本部

で開催したい意向とこのこと。教区民の積極的な参加に期待したい。

次の評議事項は「2025聖年」について、まず「開幕ミサ(昨年未)」「広島教区版リーフレット(作成配布済み)」の説明が白浜司教からあ

り、評議員からの質疑に対応された。

続いて聖年期間中の聖年関連行事企画の後援・助成金申請の募集に関する説明があった。

現時点で予定されている行事は、パイプオルガンチャリティーコンサート、青年たちのローマ巡礼、ベトナム青年大会、召命学校など。詳しくは既に教区内に配信された要綱を参照。

続いて次の評議事項は「2025平和行事」について、現時点の行事案が白浜司教から示された。

今年是被爆80周年、また昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞したことが追い風になることを期待すると共に、米国から平和巡礼団(約30人)ほか、多くの来賓が予定されているとのこと。内容については、今後、様々な手段や機会で情報発信される予定。

評議事項の最後は、「宣教司牧評議会(また小教区における信徒総会など)のあり方」について、白浜司

教からの提案、それに対する評議員の意見を求めた。提案の目的は、今後、宣教司牧評議会において「霊にどのような活用していくのかビジョン(方針)を明確にしてほしいとの要望が出されていたため。

評議員の意見を受けて白浜司教は、「宣教司牧評議会の本来のあり方についての研修などを実施する必要があるかもしれない」と。

教区宣司評の終盤に白浜司教から、地震と度重なる豪雨災害に見舞われた能登地方に、更なる義援金を送るため、聖年に併せて再度、教区民に支援を呼びかけたいとの意向が示され、評議員から賛同を得た。

以上のことが話し合われ、祈りと祝福のうちに三時間の教区宣司評を閉会した。

なお、次回(2025年度第一回)教区宣司評は、6月14日に開催予定。

本記事に関するご質問な

どは平和の使徒推進本部まで。

第二回「宣教ひろば」開催のご案内

2024年4月29日に開催された第一回「宣教ひろば」に引き続き、左記のように第二回「宣教ひろば」を開催いたします。

日 時：2025年2月24日（月・祝） 13時～17時

テーマ：近隣の小教区が「ともに歩む」新たな姿（協働体）とは

開催形式：全協働体をつぶす Z o m オンライン形式

開催場所：各協働体で決められた小教区（全21箇所）から Z O O M でオンライン参加）

スケジュール：13時・開会 13時5分～：基調講演

片柳弘史神父（宇部小野田協働体）

14時20分～：各協働体での分かち合い（各会場）

15時55分～：各協働体からの報告

16時55分～：司教メッセージ

参加について：各協働体から10名程度の参加をお願いします。（参加者登録締切1月31日）。登録されない方も Z o m 部分はインターネットで視聴できます。

これからの協働体のあり方を考えるための大切な集いになりますように、お祈り、ご参加をお願いいたします。詳細は教区ホームページ（QRコード参照）をご覧ください。



広島教区ホームページの記事 QRコード 第二回「宣教ひろば」開催のご案内 <https://hiroshima.catholic.jp/post-1795>

「2025聖年」企画の後援について

2024年12月24日から1年間にわたって、「2025聖年」が始まります。バチカンでは12月24日に教皇により聖ペトロ大聖堂の「聖なる扉」の開放を皮切りに、1年間37もの「祝祭」が行われます。（バチカンニュース <https://www.vaticannews.va/ja.html> 参照）



バチカンニュースQRコード

広島教区においても「2025聖年」をどのようにお祝いするかを計画中ですが、教区の皆様から以下のような条件を満たす関連行事を募りたいと思います。皆様から提案された関連行事につきましては、平和の使徒推進本部において審査の上、後援行事とし、必要な経費の一部を助成することとしたいと思います。

- (1) 教区、地区、協働体、教区活動団体・委員会、地区活動団体・委員会が主催する行事であること（小教区行事は含みません）
- (2) 聖年を祝うのに相応しい企画であること
- (3) 担当司祭の推薦等があること
- (4) 行事を行う日が2024年12月29日から2025年12月28日の聖年期間内であること

地区センターより各小教区、委員会にお知らせを配信してもらっています。ご質問・ご不明な点がありましたら平和の使徒推進本部 (pcaphn@catholic.hiroshima.jp) までメールでお問合せください。ご応募お待ちしております。なお、予算に限りがあるため、2024年度分の助成は締め切りました。2025年度（2025年4月～12月）につきまして

は、予算がなくなり次第締め切りとなりますので、ご了承ください。

聖書通読・写経 キャンペーン

通読完了（4回目）

No.02 小方サナエ様

（廿日市教会）

※聖書通読・写経を「2025聖年」にあたり、皆様にチャレンジをお勧めいたします。

通読、写経（新約、旧約）を終わられましたら、平和の使徒推進本部にお知らせください。

その際、通読は聖書通読・写経キャンペーンカードにお名前、完了日を入れたもの、写経は写経された聖書とお名前、完了日を入れたカードを提出ください。「2025聖年」特別完了証、記念品を準備してお待ちしています。





オンライン『教会の祈り』
QRコード
https://inori.catholic.jp

オンライン版
『教会の祈り』の
公開について

日本カトリック典礼委員会、オンライン版『教会の祈り』を、新しい典礼暦年のスタート(2024年12月1日)に合わせて、だれでも利用できるよう、一般公開しました。以下、カトリック中央協議会の許可を得て、そのホームページから、日本カトリック典礼委員会のオンライン版『教会の祈り』の説明を掲載させていただきます。



オンライン『教会の祈り』
スマートフォン画面

従来『教会の祈り』は「聖務日課」とも呼ばれて、聖職者や修道者固有の祈りのように思われてきました。しかし、第二バチカン公会議の典礼刷新によって、キリストを頭とする教会共同体が、祈りを伴って時間(生活)をささげる奉仕であることが強調され、「時課の典礼」(Liturgia Horarum)と改称されました。そのために日本の教会においては、「時課の典礼」を『教会の祈り』と呼ぶことにして、信徒の皆様にも唱えていただくように勤めてきました。このオンライン版『教会の祈り』は、日々の生活の中で、キリストとともにささげる奉仕の祈りに、よりいっそう可能な範囲で、親しんでいただくための補助的な手段です。

ラテン語規範版「時課の典礼」は四巻本として編集されていますが、日本の教会では、この規範版に従う『教会の祈り』四巻本の出版を目指していく過渡的な段階にあります。この度のオンライン版の公開は、そのための出版準備となるものです。また、オンライン版『教会の祈り』は、新しい「ミサの式次第」に準拠した式文や聖人名の新しい表記、随時追加されていく新しい聖人等の結びの祈願などを、(書籍版)『教会の祈り』に補足する役割を担うものでもあります。

『教会の祈り』を一緒に唱える際に、司牧的配慮やさまざまな理由から書籍版とオンライン版の併用は、避けられないかもしれませんが、教会共同体でこの伝統的な祈りを唱える典礼祭儀においては、書籍版の使用が望ましいことを、共通理解として大切にしていきたいと思います。

オンラインで公開されるデータは、おもにスマートフォンでの利用を配慮して編集されています。そのため、その他の端末を利用する場合、表示画面がディスプレイにうまく収まらないことがあるかもしれませんが、ご理解をいただきたいと思

います。なお、簡単なオンライン版『教会の祈り』利用ガイドを添付いたしますので、参照していただければ幸いです。

このオンライン版『教会の祈り』が、利用者の皆様の「祈りの友」となることを願いつつ。

日本カトリック典礼委員会



カルメル修道会(山口市)

2025年(聖年)5月にノートルダム清心中・高校(広島市)をお借りして広島教区ベトナム青年大会を予定しています。その心の準備で1年間かけて広島教区内の教会を巡礼しています。早朝、幟町教会に集合、教皇像の前で祈り歌を捧げた後、車に分乗して教会へ津和野・山口・カルメル会・下関・光・呉・萩・俵山マリア聖母・各教会のベトナム青年とミサと交流会をし、お互いを励まし合っています。充実した巡礼となっています。お祈りください。

ベトナム青年会の活動

地区便り

山口島根地区



聖堂献堂記念ミサの様子（光教会）

*光教会

現聖堂献堂25周年行事

1999年11月23日の現聖堂献堂式から25年、記念行事として2024年10月に「祈りのコンサート」「記念ミサ」「柳井教会と合同でバザー」を行いました。記念ミサは、司教様とアルテリヨ神父様、森晃太郎神父様をお迎えし、聖堂いっぱいの人々が集い素晴らしい式となりました。聖堂にあるモザイク壁画は、当時司牧されていたアルテリヨ神父様と当時の

信徒がひとつずつ石をはめ込み制作したもので、七つの秘跡を現した円形の石、聖堂のある瀬戸内海国立公園に位置する光市を象徴する海を表現しています。聖堂には塔があり、そこには1991年に焼失した旧サビエル記念聖堂の鐘の一つを飾っています。信徒ひとりひとりの信仰と宣教の思いが詰まった聖堂です。教会の保護者「王たるキリスト」に倣い、それぞれの十字架を担い神の許しと愛の招きに信頼して生きていけるよう、祈っていききたいと思えます。

（光教会 中原）

伯雲協働体

*第42回平和祈願ミサ

パウロ永井隆博士を

しのんで

1982年に始まった平和祈願ミサが今年も雲南市三刀屋町の永井隆記念館にて行われました。

パウロ永井隆博士は「如己愛人」をモットーとして「平和を」強く希求する方でした。博士の遺徳を偲び

功績を顕彰する三刀屋如己の会と平和都市宣言の町雲南市関係者（教育次長、市議会議長他）とともに、カトリック信者70人余り（浦上、萩、呉、観音町、熾町、倉吉、米子、松江、出雲）が参加しました。司式は白浜満司教様と7人の神父（萩、肥塚、ダン、野中、野寄、アルベルト、全）でした。

ミサ後、Sr.ジュリエッタ（イエズス聖心侍女修道会）から「韓国如己の会」について歴史と現状、会の意義について講演を聞きました。この会は1980年に大邱大司教区の故李文熙（イムヒ）大司教が来日し博士の遺徳に感銘を受けられ、両国の若者のために設立なさいました。同会は平和作文受賞者の長崎巡礼支援など今日まで活動してきました。

さて平和祈願ミサ42回目



Sr.ジュリエッタ

となる今年、奇しくも核兵器禁止を訴え平和を求め続けた日本被団協が2024年度のノーベル平和賞受賞して、その粘り強い活動が世界的に認知されました。また、永井夫妻の列聖を求め運動がイタリアで開始されて数年がたち、2022年には中村倫明長崎大司教様により「永井夫妻（マリア緑とパウロ隆）の取り次ぎを願う祈り」が認可されました。列聖への道のりはまだまだ長いと思いますが、「豚のしつぽ」のように一見役割・効果が見えないものも辛抱強く継続することによって「ひと役」を果せると信じたいものです。

（出雲教会 河上 隆一）

岡山鳥取地区

*第53回鶴島巡礼島巡礼

鶴島巡礼は、2024年10月14日（月）、晴天に恵まれ、白浜司教様他10名の司祭をお迎えして慰霊祭のミサが行われました。

また、徒歩巡礼も13日（日）の19時より岡山教会



鶴島での慰霊祭ミサの様子

を出発、日生港まで40kmの巡礼の旅が行われました。以前は、信者の有志で一週間前までに現地の掃除に行っていました。

しかし、信者の皆さんの高齢化のため行ける人が少なくなり、昨年から業者依頼するようになりました。何処の巡礼地の教会も担当者は大変です。

殉教者を思うとき、当時の彼らの苦しみは死を覚悟したでしょう。いつも長崎に帰省すると時間があるときには、西坂の殉教地と浦上の十字架山へ行くようにしています。

殉教者の気持ちを忘れず、これからもお祈りを続けていきたいと思っています。

（岡山教会 瀨口 直樹）

広島地区

*シノドスの見方、
日韓の歴史

10月6日(日) 祇園カトリック教会で正義と平和推進チーム主催で李相源神父様による講演会を開催しました。参加者は約40名、講話のタイトルは「シノドスの見方、日韓の歴史」と題して映像を交えてお話をして頂きました。韓国での軍事政権時代の仏教、プロテスタント、カトリックの活動状況、特にカトリックは軍事政権に反対運動を行い、信徒数も増加したことを



李 相源 神父 (祇園教会)

知ることができました。プロテスタントは学校教育、カトリックは病院を運営している歴史を伺いました。

次に「言葉から診た断想」では「動物園」の言葉の解釈が異なること、日本では「官民」であるが、韓国では「民官」であること、「原爆の日」の日本から診た解釈と韓国から見た解釈が異なること、「敗戦と終戦」について日本の解釈が異なること、立っている場所によって物の見え方や考え方が違ってくることを説明してくださいました。また、「在日」について、日本には無意識のうち差別意識が残っていることを教えてくださいました。

「希望は失望に終わらぬ」では、韓国の青年たちが、広島教区の「日韓の歴史」である下関、「信仰」の山口と津和野、「平和」の広島を訪れ、希望について語り合いたいことをお話し頂きました。最後に祈りのうちに講演会を終りました。

JICAARM広島便り

国籍を超えて

ともに歩む教会

ではないかと思えます。それで悩む小教区は少なくはないでしょう。

今日、広島地区の三原教会のことについて書かせていただきます。三原教会は他の教会と同様に高齢化しています。昔から外国籍信徒が多い教会です。最近、ミサ参列者からすると外国籍信徒は半分ぐらいですが、半分を超える場合もあります。そういう現状に意識しながら、バザー、トマス小崎巡礼など交流を深める機会を増やしたり、教会での責任を持たせたり、ミサを国際化させたりすることに、より国籍を超える教会を目指しています。

三原教会は文化の違い、国籍を超え、ともに歩む意識を高めようとしています。言葉の問題とか文化の違いとかを取り上げる声もよく聞かれます。しかし、心と心のコミュニ

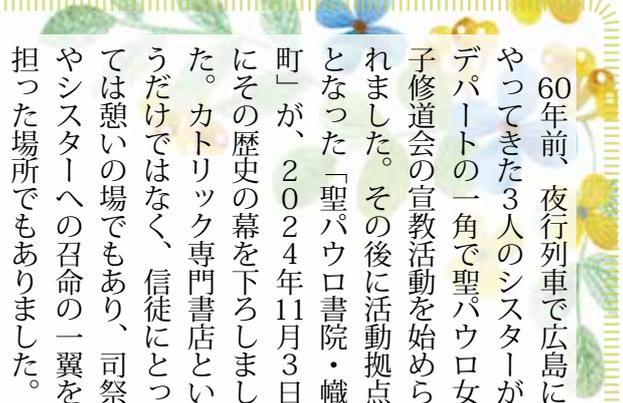


トマス小崎巡礼出発の様子 (三原教会)

ケーションで互いに理解し合うことができます。教会は神様のもので、様々な歴史的なチャレンジを乗り越えてきた神の民の集いです。これから我々の小教区の姿が変わっていくかもしれませんが、聖霊の導きにより新しいものが生まれていくと思えます。信頼と広い心を持ち、小教区の中でどのように国籍を超える教会を作ることができるかを考えましょう。

三原教会

フレデリック神父



60年前、夜行列車で広島にやってきた3人のシスターがデパートの一角で聖パウロ女子修道会の宣教活動を始められました。その後活動拠点となった「聖パウロ書院・幟町」が、2024年11月3日にその歴史の幕を下ろしました。カトリック専門書店というだけではなく、信徒にとつては憩いの場でもあり、司祭やシスターへの召命の一翼を担った場所でもありました。

最後の院長となった村上道子シスターは、なんと広島修道院の召命1号！その年月の長さを物語っています。信者、未信者かかわらずどんな方にも心を込めて対応してくださったこと、司祭会議の日には店内に溢れるほどの神父様方のリクエストに快く応えていただいていたこと等々感謝は尽きません。

幟町店の閉鎖をもって聖パウロ女子修道会は広島教区から離れ、新しい場所での宣教を始められました。「どこにいてもともに歩む心は一つ！」の言葉通り、これから

ありがとう！ 聖パウロ書院



聖パウロ女子修道会のシスター方

も心をあわせて祈り続けたいと思います。シスター方、長い間本当にありがとうございました。

これからのこと

聖パウロ書院・幟町の閉店が公表されて以来、教区には「なくなつては困る」といった惜しむ声が多く寄せられています。

現在、教区としてどうにかできないか検討中です。引き続き大切な「宣教の場」として少しでも長くみなさまと歩んでいける方法を導き出せるようどうぞお祈りください。

74 海峡からの風

下関労働教育センターだより

出会いからネットへ

韓国に関しては、難しいミッションが与えられ続ける。韓国籍の高齢夫婦が日本で数十年にわたり不法滞在の形で暮らしていたが、生活困窮により自ら命を絶とうとしたところを救われ、支援をしていたCNTIC（東京教区国際センター）から相談を受けた。彼らが韓国に帰国するには、住民登録番号がないハラボジ（おじいさん）の韓国籍証明や、受け入れ先の施設探しなど多くの課題があった。それでも、多くの協力を得て帰国が実現し、私は彼らとともに韓国のグミにある施設へ同行した。

簡単だが、それでは救えない命がある。どんな問題も解決策を探せば見つかると思っている」と語られたその言葉に胸を打たれ、待降節の重要なメッセージとして受けとめることにしよう。

帰国後、下関と北九州地域で生活困窮者支援に取り組む「いのちの関門ネットワーク」の周年シンポジウムが開催された。「制度のほざまで困窮する人々の食と住まいをどうするか」という地味なテーマながら、100人近い参加者が集まってくれた。冒頭の挨拶で、あの院長シスターの言葉を紹介した。マニュアル通りでは届かない人びとにどう手を伸ばすか。一つの答えは「ネット」にあるかもしれない。私たちが人びとと出会い、信頼関係を深めていけば、それは人を漁る神のネット（網）になっていくのだと。

（中井淳神父）

帰り際、院長シスターに「受け入れの決断は難しかったのでは」と尋ねると、「マニュアル通りなら

菊地功東京大司教が
枢機卿に



菊地功枢機卿 (写真提供：東京大司教区)

教皇フランシスコは、2024年10月6日正午、サンピエトロ広場に集まった巡礼者や訪問者と「お告げの祈り」を唱えた際、タルチシオ菊地功東京大司教を含む21名を枢機卿に任命することを発表され、12月8日ローマにて叙任式が行われました。

2017年から東京大司教を務めておられ、2023年からは「国際リタス」の総裁でもあります。また、コンクラーベ（ローマ教皇の選挙）の投票権を持ちます。枢機卿に日本人が任命されるのは、2018年の前田万葉枢機卿以来、7人目です。

菊地枢機卿は、岩手県宮古市出身の65歳。新潟教区の司教などを経て、

日本の教会のために、いつどこにおいても働いていられる枢機卿様のために祈ってまいります。

青少年の活動

高校生、全員集合！

今年度、59回目を数える中国プロックカトリック高校生大会（以下、チューブロ）。参加者募集、開始しております！

(×切…2月28日)



申込QRコード



チューブロ2025ポスター

テーマは、「FRIENDSHIPS」。聖年に開催されるチューブロを大いに盛り上げるべく、「まさに、チューブロー」といった

テーマを掲げました。チューブロは、ほんとうの友達と出会う場所。そんな2泊3日のなかで、友情や他者との関わりについて

考え分かち合う、今回のチューブロも、参加した高校生たちにとって、人生の糧となるような集いになれば幸いです。

中3〜高3の、どなたでもご参加いただけます。分からないことやご相談等ございましたら、いつでもご連絡ください。
(hsjc55@gmail.com)

昨年11月4日には、山口教会にて「Xavier Fiesta 2024」を開催させていただきました。500名を超える皆さまにご来場いただきましたこと、皆さまのご協力とお祈りに、心より感謝申し上げます。

「普段は教会へいらっしやらない方たちに、それだけ来ていただけたのでしょ。素晴らしいわ」イベント後、ある信者さんがそういつて声をかけてくださいました。実は、大成功の雰囲気の中で、「叙階式や教区のミサでは、もっと人が溢れていたはず、その景色を見たかった、見せたかった…」と、反省ばかりをしている私たちがいま

した。そんなところに、軽やかな温かいお言葉をいただき、しみじみと喜びを感じるとともに、「そうだろうだ、新しい方をお招きするということは始められたんだ。小さな動きを大切にしながら、これを着実にやっていくんだ」と、大事なことに気付かされました。

聖年を迎えた今年、巡礼企画もいくつか動き出しております。素晴らしい機会をたくさんいただけるこの年に、一人でも多くの高校生・青年が、それぞれの信仰を育む特別な体験をできますように、お祈りいただければ幸いです。

(青年活動企画室・益田)



Xavier Fiesta 2024 スタッフ一同



主の降誕、おめでとうございませう。
ベトナム人の宣教師牧師担当
マイ・ヴァン・テエ 神父

ここ数日間、私たちは主

イエス・キリストの降誕を喜び祝い、「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ1・14)と互いに喜びを分かち合いました。これは私たちにとても非常に大きな喜びです。

なぜなら、私たちは被造物であり、罪人にすぎないにもかかわらず、神は私たちに覚えていてくださったからです。たとえ私たちが取るに足らない存在であっても、「言」が私たちのために降誕してくださいました。詩編の作者もこう言っています。「人間とは何者

なのでしょう、あなたが心に留められるとは。人の子が何者なのでしょう、あなたが顧みられるとは」(詩

編8・5)。

確かに、偉大なる神である「言」が私たちのような一人の人間としてこの世に来られました。私たちと同じようになられたのは、私たちの喜びや悲しみ、苦勞、孤独、そして人生の中での忍耐や努力を分かち合うためです。ですから、クリスマスをお祝いすることは、「神が共におられる」という神祕を祝うことであり、私たちが互いに結びつき、他者と人生を分かち合うように思い起こさせる時でもあります。この結びつきと交わりはとても大切です。

トマス・マートンは「誰も一つの島ではない」と言いました。日本には多くの島がありますが、それらが互いに結びつき、一つの美しく文化的な国を形作っています。もしそれぞれの島が孤立していれば、助け合いや均等な発展が難しくなるでしょう。同じよ

うに、人々が結びつくことでより親密になり、助け合うことができ、クリスマスの精神にふさわしくなるのです。広島教区は、多くの外国人コミュニティと共に生活する場であり、このクリスマスの神祕を具体的に生きるのに適した環境です。心を開いて、主を私たちの生活に迎え入れ、平和、愛、慈善、信仰の中で他者を受け入れましょう！

2025年聖年における扉を開く行為のように、私たちの家と心の扉を開けて主を迎え入れましょう。クリスマス後の主日、すなわち聖家族の主日に、世界中の教会で聖年の扉が開かれます。聖年は恵みに満ちた一年です。教会は信者が霊的な意味を再発見し、自分の信仰を強め、深めることを助けようとしています。信仰は単なる知識ではなく、神への信頼であり、神との関係に入り、神と深く結ばれることです。

を宣べ伝え、多くの人々が神を信じるようになることを望んでいます。

今年27回目の通常聖年で、テーマは「希望の巡礼者」です。私たちは一人ひとりの人生は巡礼の旅であり、誰もが旅人です。もし旅人が目的地を知らなければ、方向を見失い、積極的な動機を持って、簡単に挫折してしまうでしょう。しかし、旅人が明確な目的地を持つていれば、どんなに困難な道であっても、その目的地に向かって努力することが出来ます。キリスト者にとつての目的地は、まさに神ご自身です。

巡礼の旅において、共に歩む仲間がいれば、互いに力を与え合い、希望を強めることが出来ます。希望こそが旅人を最後まで支える内的な力です。聖パウロの言葉にもあるように、「希望は失望に終わることがありません」(ローマ5・5)。

この聖年は、広島教区が「ともに歩むあなたかさの教会をめざそう」という10年間の計画に取り組んでいる

中で行われます。この計画は教区全体と各信者にとって希望と恵みをさらに強めるものです。願わくは、すべての信者、小教区、共同体が文化の違いを超え、共通の信仰と希望を持ち、新たな一致、平和、愛を目指していくことを願います。それが、すべてのメンバーを結びつけ、互いに協力して良い計画を実現する接着剤となるでしょう。

聖母マリア、神の母であり私たちの母である方が、神への完全な希望を生きられたように、私たちを助け導いてくださいますように！

新春の願い 「2025聖年」を機に、世界がひとつになつて平和の実現のために歩めますように。被ばく80年に向けて、教区民の平和に対する意識が高まりますように。 ぎん

風致

風致

風致



123



新春の願い 「2025聖年」を機に、世界がひとつになつて平和の実現のために歩めますように。被ばく80年に向けて、教区民の平和に対する意識が高まりますように。 ぎん